

デンマークと沖縄

日本の社会は、子どもを無意識に虐めていませんか

千葉忠夫先生 バンクミケルセン財団理事長

25S2041 池町真夕子

修士1年

ハッとした。

「日本では子どもを虐めていませんか？」千葉先生はおっしゃった。

日本の多くの親たちが、これをきいたら「なんて失礼な！ とんでもない」と千葉先生を責めるだろう。では、「子ども」と「虐め」の間にカッコを付けて、（日本の社会が無意識）に、という言葉を入れたらどうだろうか。

日本は、かつて家制度があった。明治民法で法制化され、1947年の民法改正まで続いた封建的な制度である。戸主が絶対的な権限を持ち、家の存続や家産の継承が個人の権利よりも優先された。筆者は転勤族の妻であり、これまで国内外の様々な土地で暮らした経験がある。最終的に行き着いた先が東京である。2013年までは沖縄で暮らしていた。

その沖縄は、維新以前、琉球王国として中国との朝貢関係を持ちながら薩摩藩の支配下にあるという両属の関係にあった。1879年の琉球処分で日本に強制併合された後、第二次世界大戦では唯一の地上戦を経験し、その後1972年（筆者が生まれた年になるが）まで27年間、アメリカの統治下に置かれるなど、本土とは異なる歴史的経緯を辿る。

筆者の沖縄時代、子どもがまだ幼児であったが、沖縄では、子は社会の宝として子どもを大切にする文化や、家族を重視する価値観が根強く、随分と

それらに助けられたことは生涯忘れることができない。

沖縄には「ワラビヤチュラウトウンナ」という言葉があり、子どもは美しく尊い存在であり、花を大切に育てるように、愛情を込めて丁寧に育てていくべきである、との意味を持つ。沖縄の社会が素晴らしいのは、本土（内地）に見られるような、言語化しないが、意識の根底にある。

「うちの子だけが幸せであって欲しい」といった競争原理の原形のような思想はなく、うちの子も隣の子も、子どもは皆、愛されるべき存在であるという価値観があり、随分とその思想が放つ島の雰囲気助けられた。

以前、大熊由紀子先生が、デンマークのことをお話になった際に、日本にも、捨てたものではない南国の島があることを強調させていただいた。

意外なことに、「デンマークと沖縄の社会には似ているところがあると私、思っているの」とわれらが由紀先生は、仰った。以来、幸福度ランキングの上位であるデンマークのことがとても気になっている。

わが子は、得体の知れぬ圧力に押しつぶされた。

競争を知らずにのほほんと沖縄で育った子が、転勤を機に東京入りして、小学校から競争が当たり前の環境に入る。ホモサピエンスは、環境適応性に優れた生き物であり、親の方が頑張らせたつもりはなかったが、徐々に場の空気に合わせていった。

優しい風に包まれ、幼児が道を歩くと、知らない子であっても、大人が子どもに温かい声かけをするのが沖縄のデフォルトだった。ところが、東京で暮らし始めた頃、東京出身の両親と話す機会があり、「東京では他人と目を合わせないこと！知らない人に挨拶をしちゃ駄目だと子どもに言っとかないとね」。「目が合って、相手に気があるとおもわれて、ストーカーにでもなられ

たら、たまったものじゃないから」と真顔で筆者に言い放つ。

沖縄では、幼い子を連れて歩いていると誰しもが声をかけてくれた。これが東京の現実なのか。がっかりしながらも生きていくためには受け入れるしかなかった。

いまでも沖縄のことをフトおもう。沖縄の人は、学歴で人間を評価したりはしない。人間(人柄)を観る。それが結構的確で厳しいのだ。それがそのはず、沖縄では幼稚園も、保育園も、小学校も中学校も高校も大学も、おじいおばあは、みんな「学校」と呼ぶ。それが真実を証明しているのかも知れない。筆者は沖縄を去る際には、沖縄の皆さんに人間として認められたのだ。

それから筆者の中では沖縄が愛しく大切な存在となった。しかしながら、ウチナーンチュ(生粋の沖縄県人)の友人は更にツッコミを入れる。筆者が「沖縄の人は優しいね」というと、「そっちがおかしいわけさ。沖縄の人は、人間として当たり前のことをしているだけさ。目の前で困っている人がいたら助けるさ。それ人間として当然なわけ。それをナイチャーは悉く優しいという。違うとおもう」。ウチナーンチュ(生粋の沖縄県人)は、涼しい顔しながら優しい口調で、結構厳しいことをいう。しかし、こちらは何故か腹が立たない。海からの温かい風と甘い香りと本質を突いた際どいトークが、ほろ苦い笑いを誘う。全く不思議だ。

「子どもを(日本の社会が無意識に)虐めていませんか」

子どもは自身を制御できずに走り回って、ギャーギャーいうことが多々あるが、ウチナーンチュなら、「それが子どもなわけさ」と気にすることもない。内地(本土)だと、子どもを睨み付ける大人と、気まずそうにする保護者の地獄絵図である。

最後に、いま筆者は何とか、わが子を救いたしたい。キラキラした眼差しで輝いていた沖縄時代の光景が脳裏に焼き付く。身体がボロボロになりながら、いまだ「大学に行く」といつている。日本の戦後の教育は「洗脳」だったのか。大学でなくても世界を見渡して視野を広げたら色んな道がある。千葉先生がかつてそうだったように。

ホイスホイコーレのことをわが子に紹介した。されど、「私が頑張ろうとしているのに、ママはそこから引きずり下ろすつもりなのか」と怒り出す。困ったものだ。

筆者は、いつかその洗脳が解ける日が来るものと信じて待ち続けるしかないのか。その時は千葉先生を訪ねて親子でデンマークに行くかも知れませんのでよろしくお願いいたします。今日は貴重な対話型の講義をありがとうございました。

人間は本来みな平等、理想論を掲げていても仕方ないけれど、筆者は沖縄の経験から人間を中身で観たい。そして、徳を積み、誰かのために「愛」を配ることができた人ほど尊いと真面目におもっている。人間生きている時間には限りがあるけれど、その間にどれだけ「愛」を配り「徳」を詰めるかの、そちらの競争でありたい。

千葉先生はホンモノでした。出逢いに感謝いたします。